

俳諧師

映画文学人生論

原作：高浜虚子 (1908) 「国民新聞」
参考：続俳諧師 (1907) 「国民新聞」
鶏頭 (1907) 「春陽堂」
柿二つ (1915) 「朝日新聞」
子規居士と余 (1911-15) 「ホトトギス」
漱石氏と私 (1917) 「ホトトギス」

金なんか儲けなくつてもよい。政治家も面白くない。かくて三蔵は文学者と決心した。

高浜虚子『俳諧師』は文学とは何か、俳句とは何か、金儲けとは何か、という問題をあらためて考えさせてくれる自伝的な小説である。

主人公の三蔵は明治二十四年三月、十八歳で伊予尋常中学校を卒業、九月に京都の第三高等学校に入学した。将来の志望については、「金儲けには医者がいいよ。医者にならぬか」と、兄から勧められ、「君は政治家になる筈ではなかったかと中学校の仲間からいわれた。

三蔵は金なんか儲けなくてもよいと思った。政治家は初めその花やかな点に心がひかれたが、それほど面白くないと思うようになる。かくて三蔵は将来の志望を文学者と決心した。文学は束縛の少ない自由の天地である上に又政治について花やかな天地である事も三蔵の心をひきつけた。

彼は試験の時間は誰よりも早く出して残った時間は控室で早稲田文学と柵草紙の没理想論を反復して精読した。小説では幸田露伴の『露団々』や『風流伝』を愛読する。露伴のように二十一歳までに処女作を出さなければならぬと考えた。

しかし、小説はなかなか書けない。学校の勉強はなまけていたら、成績はどん尻。もはや足場を立て直すことが出来ない弱者の地位に落ちたと思ひ込み、とうとう退校届を出してしまった。

「これからどうする積もりか」と、ドイツ語の



俳諧師

映画文学人生論

教師から質問されると、「小説家になります」と三蔵は答えた。小説家の知人はいないが、俳諧師なら五十嵐十風（モデルは新海非風）や篠田水月（モデルは藤野古白）を知っており、新派俳諧の指導者越智李道（モデルは正岡子規）からも手紙で俳句の添削を受けている。

「君はまだ二十一歳ではないか。それで小説家になれる積りか。ゆく／＼はなれるとしても目下の処どうして衣食する積りか」と聞かれたが、三蔵は当面の衣食のことは考えていない。「兎も角上京する積りです」と言った。十風か水月に逢えば、なんとかなるだろう。しかし、三年後の明治二十八年に十風は病気で死に、水月は自殺した。

それでも「三蔵は尚ほ小説に意を断つことが出来ぬ。当時売り出しの硯友社の作物などを見ると物足らぬ所が多く、何所にか新しい境地があるやうな心持がする。已むを得ず時機の至るを待つこととして、暫く俳句専攻者として立つことにする」という結末で、小説『俳諧師』をまとめた。

夏目漱石はこれを読んで、小説を低廻趣味の余裕派と非余裕派の二つに分け、虚子の小説は大抵余裕のある小説であると評したが、虚子はやがて小説を断念して、俳諧師に専念する。「ホトトギス」は俳句の専門誌に徹することによって経営が安定。金も儲かるようになったかもしれない。

春風や鬪志抱きて丘に立つ 虚子